

平成 28 年度

学 位 論 文

武道における礼の概念と体育授業への展開

兵庫教育大学大学院学校教育研究科

教育内容・方法開発専攻 行動開発系教育コース

学籍番号 M15211C

氏名 竹内 友季子

目 次	ページ
I 序章	
1 研究の背景	1
2 武道の礼法に関する先行研究	3
3 課題の所在	5
4 研究の目的	7
5 本論文の構成	8
II 「礼」,「礼法」の歴史的発展と本来の意味	
1 古代中国における「礼」の概念	9
1.1 祭祀としての「礼」の誕生	9
1.2 国家統治としての「礼」	10
1.3 中国における古代武術への「礼」の反映	12
2 「礼」の日本伝来	14
3 武家礼法の確立	15
3.1 武家礼法の誕生と歴史的発展	15
3.2 小笠原流とは	16
3.3 学校教育への武家礼法の導入	18
4 「礼」,「礼法」のまとめ	20
III 「礼法」の構成内容の特定に関する検討	
1 予備調査の実施	23
2 仮説的構成概念の検討	25
3 質問紙の作成	26
4 トライアンギュレーションの実施	27
5 調査の手続き	29
5.1 調査方法	29
5.2 調査内容	31
5.3 統計処理	32

6	結果	33
6.1	因子構造の抽出と因子の命名	33
6.2	内的一貫性の検証	36
7	武道授業における「礼」,「礼法」の考察	37
IV 「礼にはじまり礼におわる」の解釈		
1	「柔の理」とは	39
2	「柔の理」と「礼法」の相関関係	41
3	武道の動きと「礼法」の関連	43
V	まとめ	46
注		
	引用・参考文献	50
	付録	51
		53

# I 序章

## 1 研究の背景

術から道へと姿を変え、現代においてもなお、武道は日本の伝統文化を学ぶ教材であるとされている。伝統文化を学ぶ教材として用いられている武道について、武道憲章前文（注 1）では、「武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、心胆を鍊る修業道・鍛錬法として洗練され発展してきた。このような武道の特性は今日に継承され、旺盛な活力と清新な気風の源泉として日本人の人格形成に少なからざる役割を果たしている。」という説明がある通り、精神の鍛錬を主とする武道の修養主義を以てその存在意義を主張し、武道を行うことが日本人の教育そのものであると捉えられている。それ同時に、修養主義こそが武道の伝統文化であるとされており、修養主義的な伝統文化は「礼にはじまり礼におわる」という言葉に特徴づけられるように、「礼法」に象徴されている。

湯浅（2011）は、「実践」としての武術は、そこから抽出された「わざ」としての「芸」の修得・洗練、それ自体に価値を見出すようになり、武術の「武芸化」という文化的価値を創造し、「武道」が「わざ」や「芸」という文化的価値の追求を通して自己の心身のあり方を求めるという「自己修養」という教育システムをも包含するものへと変質したと述べている。

また、田中ら（2005）も武道の修養について、「我々がいま、受け継ごうとしているのは、江戸中期以降の平和になった社会において求められる、『人間教育の道』としての内容を整えてきた『武道』である。そこで目指すべきものは、決して『相手を倒す術』ではなく、『術を手段に、相手と共に成長していく道としての武道』である。」と述べている。

そして、平成 18 年に教育基本法が改正され、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。（教育の目標第二条、五）」と明示され、伝統と文化の学習が重視されるようになった。それに伴い、学習指導要領も改訂され、各教科において伝統と文化について学ぶこととなった。「伝統と文化の尊重」という教育を行うものとして、

保健体育科では、武道領域がその役割を引き受け、その機能は、武道の特性として修養主義的な価値に託されている。そして、学習指導要領においては、「礼に始まり礼に終わるなどの伝統的な行動の仕方を自らの意志で大切にしようとする事（文部科学省，2008）」と示されているように、態度の内容として、武道と同様に、修養主義的な伝統文化を学習する教材として、「礼法」が取り扱われている。

## 2 武道授業と礼法に関する先行研究

武道授業に関する先行研究は、指導法に関するものと武道の文化的側面に関するものの2つに大きく分類できる。指導法に関する研究としては、いわゆる、どのように攻防を展開して、勝敗まで進めるかという内容のものである。一方、武道の特性に関する研究としては、礼や礼法に含まれていると捉えられがちな、武道がもつ修養主義的特性についての内容のものである。本稿では、本研究と関わりのある後者について述べることにする。

武道の修養主義的特性は、日本武道協議会（2008）が、武道の理念を「武道は、武士道の伝統に由来する我が国で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道を修練して心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、国家、社会の平和と繁栄に寄与する人間形成の道である。」と示したことで、武道が「人間形成のための武道」と認識されるようになったと言っても過言ではないだろう。

武道の修養主義的特性と「伝統的な行動の仕方や考え方」とは、結びつけて考えられていることが多く、田中ら（2005, p227-228, 254）は、武道を「人間形成の道」とであると考える立場をとり、武道の具体的な指導として、「伝統的な行動の仕方を重視する」「礼儀作法を尊重する」という方向性に沿って、武道は「敵＝相手」の存在を前提にして術理が体系化されていることを示した上で、①相手と正しく正対すること、②相手の目を凝視すること、③相手と心を込めて礼をすること、④腹の底から大きな掛け声を出すことが必要であるとしている。また、その指導ができるためには武道教師の確かな力量と校内における信頼、評価が不可欠であり、その全身全霊を込めた徹底指導の中から生徒たちは自ずと「伝統的な行動の仕方」や「礼儀作法」を学び取っていくのだと述べている。

これに関連して、武道等推進事業（スポーツ庁政策課学校体育室、2016）が、伝統文化を学ぶ礼法指導の具体的内容として報告している「礼儀を重んじ相手を尊重する意義の徹底」をはじめとし、全国各地で実践されている礼法指導が多数報告されており、「武道指導推進校」の実践内容に関して研究を進める野村ら（2001）が、「徳育重視の教育改革論議が盛んに行われている中で、学校教育に対する道徳教育充実の要望は推進校発足当時と同様に存在し、小・中・高校生、指導者達からは剣道実践における礼儀作法等の人間形成に関わる教育的価値が依然根強く認められている」と指摘するよう

に、武道必修化から5年が経とうとしている現在においても、武道授業で取り扱う徳育としての礼法指導への関心は依然として高く、それに関する研究が要求されているのである。

また、菅野(2011)は、教育カウンセラーという立場から、子どもたちの稽古場面の見学や武道経験者の学生のインタビューや、武道指導者からの聞き取りを行っている。その中で菅野(2011)は、武道こそが現代の学校教育や家庭教育では果たせないものを子どもの心身に与えるのではないかと捉え、武道を通じて①健全な自己イメージの基になる基礎体力、②人間関係の基本となる、礼儀、気配り、仲間へのいたわりなどの社会的行動、③困難に立ち向かい、克服していく態度、④自分と出合わせ、自己成長を遂げる態度、以上の4点を育成できると述べている。

上記に示した知見は、いずれも武道は人間形成を目的とし、武道をすることによる「修養」をもってその目的を達成するとし、それが伝統文化であると主張するものである。

ここまで、武道の修養主義的特性と武道授業における礼法指導について述べてきた。しかし、それに対して、次のような指摘もみられる。

有山(2012)は、教科体育として扱う武道に関して、「自国の文化を学ぶという掛け声のもと、運動には直接関係のない道徳的規範や礼法の習得に体育教材としての価値や意味を安易に求める陰で、『柔道で何を身に付けさせるのか』という体育の学習内容を問う基本的な論議は置き去りにされたままである」とし、これまで無自覚であった競技と教科体育の立場を区別した上で、運動の文化的価値という側面から柔道の知識や技術等に関する学習内容を特定するとともに、その学習構造の再構築に向けた検討を行っている。

また、中村(2007)も武道の修養論を学校体育にも反映させていることに疑問を抱く立場をとり、「『相手を尊重するなど礼儀作法を重視するとともに、勝敗に対しては公正な態度で練習や試合ができることなどが求められる』としか説明されておらず、具体的な「行動の仕方」との結びつきは何も示されていない。」と指摘している。

このように、武道における修養主義が強調される中、それに疑問を抱き、本来、武道が持ち合わせる特性や、武道と伝統とのつながりを明らかにしようとする研究がみられ、本研究への示唆を与えたものの、武道と礼法や伝統との結びつきを示す具体的内容は未だ明らかにされていない。

### 3 課題の所在

前章で示した先行研究から、武道は修養主義を強調した人間形成を行うためのものであると捉えられ、徳育として指導されていることが現状であることがわかる。そして、徳育として人間形成を行う上で、とりわけ「礼」をすること、「礼儀作法」を守ることとが結びつけられ、それらが重視されている。

しかし、強調されている修養主義的な価値の歴史は、およそ 100 年というもので、決して深いとはいえない。承知の通り、「武道」は「武術」から変化したものである。明治 15（1882）年に嘉納治五郎が柔術を柔道に変えたのが発端であり、他の武術もそれに習い、術を道に変えていった。そして、柔道、剣道、弓道の総合名称としての「武道」が定着したのは、大正初期なのである（田中ら、2000, p15）。

そして、修養するにあたって重視されている礼法に関しては、「礼<お辞儀>をするという動作のみが重視され、その形式的な部分にこだわることに教育的価値があると捉えられている（末次、2009）」<sup>1</sup>。これに関して、有山・山下（2012）が指摘するように、「柔道の礼法が我が国固有の文化を象徴するものならば、礼という行為に、相手への尊重や敬意などという万国共通の価値観以外に、日本人独特の気風（ethos）や社会的態度が反映されていることが示されねばなら」ず、現状のままでは、「礼」に、どのような日本の独自性や伝統が存在するのかが不明である。

また、学習指導要領解説においても、態度の内容の解説で、『「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする』とは、伝統的な行動の仕方を所作として単に守るだけではなく、礼に始まり礼に終わるなどの伝統的な行動の仕方を自らの意志で大切にしようとすることを示している。そのため、相手を尊重し、勝敗にかかわらず対戦相手に敬意を払う、自分で自分を律する克己の心を理解し、取り組めるようにする（文部科学省、2008, p114）。』と示されている。しかし、その学習内容は不明確であり、教科体育の武道授業においても、運動文化と関係のない修養主義と結びつけた礼法指導が行われている現状である。

さらに、現職の教員によると、礼法指導の評価は、教員の主観をもととした目視によるものが主流であり、評価規準が曖昧であるのも現状である。

以上のことから、武道授業における礼法に関する課題として、次項の 3 点が指摘できる。



- ①武道における「礼法」と自国の伝統文化とのつながりが不明瞭であること
- ②武道における「礼法」の意味内容に独自性がみられないこと
- ③伝統的な行動の仕方としての「礼法」の内容が不明瞭であること

## 4 研究の目的

前述してきたことから、武道において「礼」という概念が、重視されているにもかかわらず、その詳細は非常に曖昧であることがわかる。したがって、現在、曖昧なままである「礼」を明らかにし、武道の伝統文化として伝えるべき「礼法」を示すことが本研究の意義である。

そして、それを解明しない限り、「体育」として「礼法」を学習する価値があるのか、あるとするならば、何を学ぶのかという問いが生まれる。教科体育の学習として、武道授業を通じて「礼」の何を教えるのかを考えることが極めて重要なのである。

したがって、前章の課題を受け、以下に示す①、②、③の3点を明らかにすることを通して、教科体育の武道授業において学ぶ、伝統文化と結びついた日本固有の「礼法」の捉え方を明示することを本研究の目的とする。

- ①武道の「礼法」が確立した歴史的経緯
- ②日本独自の考え方が含まれる武道固有の「礼法」の本来の意味
- ③伝統的な行動の仕方としての「礼法」を構成する内容の特定

## 5 本論文の構成

本論文は、I 序章、II 「礼」、「礼法」の歴史的発展と本来の意味、III 武道授業における「礼法」の評価尺度の作成、IV 結果と考察、V まとめ、からなる。

I では、現在の武道授業における礼法指導に関する先行研究の検討及び課題の所在を明らかにしたうえで、本研究の目的を示した。

II では、「礼」、「礼法」の歴史的発展と本来の意味を明らかにするため、中国における「礼」の起源や変遷を示した（第1節）。次に、「礼法」の歴史的発展と日本オリジナルの「礼」、「礼法」の本来の意味を明らかにするため、日本に伝来した「礼」が、日本でどのような役割を果たしてきたのかを示し（第2節）、「礼」の概念を生かして確立された「武家礼法」の歴史的発展と、武家礼法の代表格である小笠原流について示した。また、武家礼法の学校教育への導入についても示した（第3節）。最後に、第1節から第3節までの総括として、「礼」、「礼法」を整理した（第4節）。

「礼法」が、武道の伝統文化であることが明らかになったことから、武道授業において「礼法」が学習可能な教材となり得ることを検証する必要があるため、伝統的な行動の仕方としての「礼法」の構成内容を把握することとした。よって、III では、「礼法」の構成内容の特定に関する検討について示した。

III の第1節から第4節は、「礼法」の仮説的構成概念を設定するために、武家の礼法を確立した小笠原流礼法に着目して行った予備調査、それをもとにした仮説的構成概念の検討、質問紙の作成、客観性の高い質問紙を完成させるためのトライアングルーションの実施について示した。第5節では、調査対象者や調査方法、調査内容、統計処理などの、調査の手続きを示した。そして、「礼法」の構成内容の分析結果として、「礼法」を構成する因子の抽出と因子の命名、内的一貫性（第6節）について示し、それらを通して武道授業における「礼」、「礼法」について考察した（第7節）。

IV では、「礼法」は、武道の動きや技にも生かされていると考えられることから、「礼法」は武道全般にかかわるものであると考え、武道の動きに関して示した、柔道の技の原理を証明した「柔の理」と「礼法」の関連を検証することとした（第1節）。「柔の理」と「礼法」相関関係を検証し（第2節）、相関関係の検証から、武道の動きと「礼法」の関連を検討し、「礼にはじまり礼におわる」の意味を再検討した（第3節）。

V では、本研究の総括として、I ～IVまでのまとめを示した。以上が、本研究の構成である。

## Ⅱ 「礼」,「礼法」の歴史的発展と本来の意味

### 1 古代中国における礼の概念

#### 1.1 祭祀としての「礼」の誕生

本節では、古代中国において発生した礼の起源について述べる。

礼という字は、旧字体で「禮」と書かれ、神を表す「示」と祭器を表す「豊」が合わさっている（下見，1973）。神に仕え、神を祭ることを意味していたことから、礼は、本来は神や先祖を祭る、祭祀にまつわるものであるといえる。

では、なぜ礼が祭祀にまつわると言えるのかというと、それは、礼が、天から授かったとされる陰陽五行説に由来するからである。陰陽五行説とは、万物の化成は相反する性質をもつ陰・陽2種の気の消長によるものとする陰陽説と、万物は天地の間に循環流行して停息しない木・火・土・金・水の五つの元気によって組成されるとする五行説を組み合わせたものであり（岩波書店，1998），2200～2300年前に鄒衍（すうえん，注2）によって唱えられたとされている（馬場，2008）。

古代中国人は、この陰陽五行説に従い、生活や農耕における決まりを定め、複雑な宇宙自然の内容や動きを形式的に分類し、人間の生活リズムを形成しようとし、自然の動きと人間の営みを調和させていたのである（末次，2009，p. 307）。神や天に対して、人々は謙虚であり、崇敬の態度を保ち、身を清め、神や天のような超越的存在に対する作用行為が礼なのである。

つまり、人間を超えた天命的なものと関わることに礼の含意があると捉えられる（末次・猪越，2013）この時点において、礼は、人間が「天の法則に従うための概念」とであると解釈できる。

## 1.2 国家統治としての「礼」

しかし、その後、人間社会が発展するにつれて民族ができ、多数の民族が集結した国は乱れがちになっていった。なぜなら、民族ごとに考え方や行動が異なり、それぞれが思うようなふるまいをしていたからである。したがって、その乱れを解消するために、国としてのまとまりが必要となった。そこで、万人が納得する、理にかなった全国的な共通認識としての規則や規律を定めるにあたって、陰陽五行が利用された。陰陽五行は、「占い」「暦法」「天文学」をはじめとし、「道德」「法律」「医学」「農事」まで、社会生活の全般にわたっていた。人間関係において、人々が守るべき一定のルールであった「礼」も、陰陽五行を生かしてできたもののひとつである（馬場, 2008, pp. 14-16）。

では、「礼」と人間社会が関わり始めた頃であると言われている、『孔子』,『荀子』,『礼記』における「礼」の考察（末次・猪越, 2013, pp. 667-672）を参考に、国家統治の役割を果たしていた「礼」について述べる。まず、『孔子』における

「礼」に関して、「礼」の思想は、乱世と呼ばれた春秋時代末期（約 2500 年前）を生きた孔子によって説かれた。下剋上の社会では、暴力による権力の奪い合いが生じ、孔子は、それが世の乱れの原因であると考えた。そこで、「礼」による新しい道德と政治を提唱し、秩序ある社会の建設を試みた。孔子は「礼」を、道德心と備え、そこから行動の意味を理解し、納得して自ら従う、人間がとるべき行動のきまりと考え（狩野, 2015）、個々の人間が、天下国家とどのように向き合うべきかと論じた。また、孔子は、仁をまごころであると考え、仁が「礼」の中心にあると説き、仁をもって「礼」を行うことが重要であると説いた。

次に、『荀子』における「礼」の思想に関して、荀子は、領域国家が形成された春秋戦国時代（前 4 世紀末）に生まれたとされている。荀子は、人間は生まれながらにして悪であるという「性悪説」の立場をとり、人間は悪であるため、秩序を自ら実現できない。よって、秩序は人為的に実現すべきだと主張し、「礼」は人間の欲求を軽減する欲望制御の方法であると説いた。

最後に、『礼記』における「礼」の思想に関してだが、『礼記』とは、周末から秦・漢時代の儒者の古礼に関する説を集めた書であり、荀子以前の「礼」の思想を編集し、構成したものである。『礼記』において「礼」は、敬を持って接すること、言葉を慎むことが、人と接する際の心構えであり、何事も「礼」で調整・調和するこ

とが重要であると説いた。

これらのことから、人間同士の関わりにおける「礼」は、あらゆる場面において調和状態を保つために、まごころを持って「礼」を行うことや欲求を制御すること、また心構えなど、他者と関わる上で、人々が持つべき共通認識や守るべき行動の基準であると解釈できる。

ここまでの中国における「礼」の概念をまとめる。まず、古代中国における「礼」は、陰陽五行説に則った祭祀にまつわる「天の法則に従うための概念」であると考えられる。その後、人類の進化とともに、国家統治が必要となり、「礼」の対象が天であったものが、人間同士となった。そして、「礼」は、まごころを持つことや欲求の制御、対人時の心構えなどの人間関係における共通認識や行動の基準として、「国家秩序を維持するために人々が守る概念」と解釈できる。前者の「天の法則に従うための概念」は、天と人の関係を、後者の「国家秩序を維持するために人々が守る概念」は、人と人の関係を取り持つものであり、いずれにせよ、調和を目指したものであった。

この中国における調和について、リチャード（2004）は、「中国人の社会生活は他者との協調を重んじ、自由ではなく『調和』（道教においては人間と自然の調和、儒教においては人間と他の人間との調和）をモットーとしていた」と指摘している。中国では、調和をつくることを重視していたのだが、そのつくり方に「正反対でありながら相互に浸透しあうことによってお互いをつくりあげ、お互いの理解を可能とし、一方が他方へと転化するための条件をつくり出す（リチャード，2004，p. 27）」というような、先に述べた陰陽の考え方が生きているのである。

### 1.3 中国における古代武術への「礼」の反映

これは、日常生活の調和にとどまらず、古代武術においても陰陽の考え方が生きているとされており、竹田ら（2002）は、中国における古代武術の成立に関する研究を主題とする報告において、中国文化の伝統の中で培われた三つの基本観念が、武術の発展に大きな影響を及ぼしたと言及している。その三つの基本観念を、伝統的な道德観、天人観、陰陽観としている。

伝統的な道德観とは、道德と武力とが合一した武術の価値観の規範、「武徳」である。武徳は、練武、用武の際に、守られるべき道德規範である。

天人観とは、「天人を合し、内外を一にする」ことで、天・地・人間は相互に関連し合い、相互に影響し合う観念である。これが、武術意識にも浸透し、調和と闘争の合一意識を形成した。つまり、闘争の基礎には調和があり、人と闘争する前には、自分自身を調和させる必要があるということである。

陰陽観については、本章の序盤でふれたが、中国では、陰陽を万物の基礎とし、宇宙万物を陰陽二類に大別し、陰陽が相互依存、相互制約、相互転化するという考え方としており、武術においても虚と実、速と遅、動と静など、相手を制する法を説くものであり、対人攻防理論の形成に影響を与えた。動静、開合、剛柔、虚实、進退、伸縮、攻防など相互に対応する現象を陰陽に分類し、さらに陰陽の変化規律により、これらが規範化されることによって、陰陽の変化規則による実践指導が形成された。

また竹田ら（2002）は、武術構造における表層、深層、中層の分析によって、武術の要素と文化の要素が二つとも存在しており、文武融合、統合一体化して武術体系を形成していると明らかにしている。そして、整合現象は、武術の伝統は、完成すると不変というものではなく、絶えず文化的要素を吸収し、発展していくこと、武術の本質は、相手を打ち負かす能力の向上であること、武術の哲学の思考や判断に基づいて、自らの武術実践をおこなうわけであり、武術哲学が武術発展の鍵となることを指摘している。

竹田ら（2002）の報告から、中国の文化の形成は陰陽をもとにした調和づくりであり、武術の技法理論の形成も同様であることがわかる。したがって、「礼」は、人間関係や武術の技法理論において、調和をとるための共通認識や行動基準であると考えられ、陰陽という対立した要素の融合による「陰陽で調和をつくる概念」であり、

「礼」は中国独自のものだと言えるであろう。

## Ⅱ 「礼」,「礼法」の歴史的発展と本来の意味

次節では、以上のように成立・変化した「礼」を受けた、日本の「礼法」について述べていきたい。



## 2 「礼」の日本伝来

中国で発祥した「礼」が日本に伝来したのは、『日本書紀』や『古事記』によれば、応神天皇の御代に、朝鮮半島から渡米して来た王仁によって『論語』と『千字文』やもろもろの典籍が伝えられたと見え（狩野，2015，p4）,「礼」は『論語』とともに入ってきたとされている。日本に入ってきた「礼」は、もちろん中国の思想や制度を取り入れているが、敬神、崇祖、尊王の心をもつ、皇室祭祀から始めるという、日本独自の発展をみせている。独自の発展をみせた「礼」が政治の中心に置かれたことは、以下に示す、604年に発布された聖徳太子の「十七条の憲法」第一条、第四条に記されていることからわかる（小笠原，2010）。

### （第一条）

一に曰く、和を以もって貴しとなし、忤うこと無きを宗とせよ。人みな党あり、また達れるもの少なし。ここをもつて、あるいは君父に順わず、また隣里に違ふ。しかれども、上和ぎ下睦て、事を論うに諧うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。

### （第四条）

四に曰く、群卿百寮、礼を以て本と為せよ。其れ民を治むるの本は、要ず礼に在り。上礼あらざれば、下斉わず、下礼なければ、必ず罪あり。是を以て、群臣礼あるときは位次乱れず、百姓礼あれば、国家自から治まる。

### （17条の憲法）

第一条では、和を大切にし、上の者も下の者も協調・親睦の気持ちを持って講義するなら、おのずから物事の道理にかなう、どのようなことも成就するという要旨で、第四条は、高官や官吏たちは、礼の精神を根本に持ち、群臣たちに礼法が保たれている時は社会の秩序も乱れず、庶民たちに礼があれば国全体として自然におさまるものであるという要旨である。

第一条の「和をもつて貴しとなす」は、その起源は『論語』の中の有若（ゆうじゃく、注3）の言葉であり、「和」は、『論語』における考え方で、「自分を捨てずに他者と協力して新しいものを生み出すこと」を意味する（狩野，2015，p. 247-249）。この時代においては、前項で述べたように、「礼」の、欲求の制御や人間関係における共通認識を持って行動することで、「和」とバランスをとりながら、国家秩序を保ち、政治を進めていったのである。

### 3 武家礼法の確立

#### 3.1 武家礼法の誕生と歴史的発展

まず、日本における礼法観は、中国の三礼書である『礼記』『儀礼』『周礼』に倣ったものであり、特に『礼記』の影響が大きかったとされている。『礼記』では、日常の礼儀作法にもふれており、日本の礼法確立に大きな影響を与えた（小笠原, 1991）。『礼記』の影響を受けた礼法観は、まず、朝廷の有職故実に反映されたであろうと考えられている。そして、日本での礼法の広がりや端緒は、武家礼法にあると神崎（2016）は指摘する。

武士という新興勢力が安定したところで、その特権意識を誇示すべく新たな礼法がつくられたとみられ、有職故実とは別系統の故実家・礼法家が重んじられることにもなった。それはすでに定説化されており、武道礼法は、約 200 年前、室町時代の足利将軍のもとで始まったのである。そこで、後の江戸期まで通じる武家故実家、あるいは武家礼法家として、伊勢家・小笠原家などが登場する。

小笠原家は、主に弓馬術などに関係しての屋外礼法であり、伊勢流は、主に殿中作法などに関係しての屋内礼法である。武家故実と言われる時代であったが、小笠原家では、「宮中の儀式として、故実により厳格に行われていたものでしたが、武家の儀式としては省略できるものは省略し、新たな時代考証の下に武家による武家の儀式として定められたのです（小笠原, 2010, p. 36）」とあるように、それまでの有職故実や大名礼法から少し離れて、一般武家やその子女をも対象とした諸礼法を説き、日々の「しつけ」としての礼法を樹立していった。

一般的に、小笠原流が江戸期における唯一の礼法とみられがちだが、伊勢流も広く伝わっていた。しかし、伊勢流は旧守的であり、時代の変化に対応しにくかったため、小笠原流が今日に至るまで、広く支持されているのである（神崎, 2016, pp. 107-122）。

### 3.2 小笠原流とは

ここからは、前項で登場した小笠原流を紹介しながら、武家の礼法について検討したい。

小笠原流礼法は、第五十六代清和天皇（850～881）を始祖とする清和源氏である。現在は、小笠原清忠先生が弓馬術礼法小笠原教場、三十一世小笠原流御宗家である。

小笠原流は、礼法、弓術、弓馬術の伝統をすべて意味するもの（小笠原，2015）で、小笠原流礼法は、鎌倉時代から江戸時代に至る武士の礼法であり、弓術や馬術と結びついていたもの（小笠原，2015，p. 10）である。小笠原流は、はるか遠い昔、武士が身に付けるべき公式の行動規範であり、小笠原家は、将軍家の礼法指南を務めていた。それは、江戸時代のみならず、源頼朝以来のことで、鎌倉幕府が誕生してから室町時代を経て幕末に至るまで、小笠原流は一貫して武家社会における公式礼法であった（小笠原，2015，pp. 2-3）。

武家政治に移ってからは、大江広元、三善康信、小笠原家の初代である小笠原長清らが、宮中のしきたりや神社仏閣の規範、民間伝承、外来の文化などを一般化した武家の礼式を編纂した。これは、神を敬い、主人を尊ぶことを中心に、服制や儀礼、日常の諸手続きにわたるものである。そして、これらを武家の法典とした。室町時代になると、後醍醐天皇に仕えて昔からの和漢の記録を調べ、武家の定まった方式として、起居動静の式をはじめとする言語令などを64巻にまとめ、『修身論』を天皇に献上した。この時代に武家の礼法は整備され確立されたと言えるだろう。江戸時代になると、17代小笠原経直は慶長9（1604）年、徳川家康に招かれ、徳川秀忠の糾師範となると同時に、諸大名や旗本諸士を指導することになった。以後、封建制度の確立により礼法もさらに整備され、封建制度維持のために厳格で複雑なものになる。この時代の礼法は、指導者階級である上級武士のためのものとして編成され、主に法典を意味していた。江戸時代までの「礼」は、社会規範としての「礼儀および法規」を意味している。

では、武士の嗜みとしての「礼法」は、どのようなものであったのか。武家社会では武術を「常」の修行の糧として、実社会の生活の中に活かすことを主題として考えており、武術は、天の道、人の道という大きな自然の決まりごとの中でこそ修行が行われ、一貫して「礼」により守られてきたものである。孔子の「勇にして礼なくば即ち乱す」の教えを、日本人は戦いの場においても守って実行したのである。孔子が説いたのは、「礼」という、ひとつの考え方である。

そこで、武家礼法というと、小笠原流礼法だと言われるが、その理由は、これまでに述べてきた小笠原流の歴史的発展の経緯から、日本において小笠原流がどのように位置づけられてきたかということから理解できるだろう。

小笠原流では、礼法または、それと類似した語でよく使われる作法とは、「違和感なく社会生活が円滑に行われるための大切な自然の営みの一つ」であると考えられている。また、礼法とは一個人の考えではなく、また一個人が作ったものでもなく、人間の身体の機能と、物の機能が理解された時に、それが「仕草」として現れるものであるとされている。

そして、小笠原流では、『修身論』と『体用論』に、礼法に関する重要事項がまとめられている。『修身論』では、礼における行動の教養のあり方について説いており、その基本はあくまで自然であり、日常生活の中に本当の自然を、知識の教養、行動の教養として習得していくことに眼目がおかれている。一方、『体用論』には、体をいかに扱うべきかについて記されている。「心」と「体」が一体となった時に、初めて小笠原流の真髄が発揮されるのだ（小笠原，2015）。

また、古来、日本人の考え方は、形や心に対して美しさを求めると同時に、実用的な面も求め、さらにもう一つ、省略という考え方も求められた。つまり、無駄を省くことである。無駄がないということは、そのまま実用につながり、この実用に美しさを求めているのである。この「実用・省略・美」に関連性を持たせているのが、日本の武道の基本的な考え方であるとされている。「実用・省略・美」を実現するために、小笠原流礼法では、「正しい姿勢の自覚」、「筋肉の働きに反しない」、「物の機能を大切にする」、「環境や相手に対する自分の位置（間柄や間）を常に考える」の4つの教えがあげられている（小笠原，2015，pp. 55-60）。この4つの教えに基づき、「実用・省略・美」が実現した動きが、礼法に則った武士の動き、あるいは日本らしい動きと言えるのであろう。

### 3.3 学校教育への武家礼法の導入

明治維新からは、四民平等の社会になり、武家のように厳しくしつけられた子どもばかりではなくなったため、学校教育に躰の分野までが委ねられるようになった。そして、明治5年、近代学校制度発足の年から、小学校の修身科の中に修身口授（行儀の論し）が示され、修身教育の一貫として、家庭で行うべき躰を学校が代行することになった（小笠原，2010，pp.38）。また、明治44年に文部省が師範学校や中学校、小学校に作法教授の要綱を出し、大正2年には小学校に作法教授資料が頒布され、昭和12年に作法教授要目、昭和16年には新礼法要綱を作成し、作法の徹底を行った。礼法要綱の趣旨は、「本要綱は礼法の基本を授けんとするがために、自ら形についての記述が多くなっているが、もとより礼法は、心と形と相俟（あいま）って全きものであるから、教授に際しては、形の指導のみに偏せず、その精神が体得せしめることを旨とし、日常不断に実践せしむべき」としていることから、これをもって、国民一般の礼法の基準が定められた（小笠原，2010，pp.42-43）。

このような経緯によって、武道の礼法は確立された。「礼法」の役割は、朝廷礼式から武家社会に変化し、さらに武家社会の消滅によって、国民の教育となったのである。

では、なぜ、礼法を国民教育として姿を変えてまで残す必要があったのだろうか。結論から言うと、「礼法」を、日本のアイデンティティとして位置づけたかったからである。

明治維新後は、文明開化の影響や廃刀令等により、武芸・武術は衰退した。しかし、明治10年代になると、警察や中学校において、武術が教育の有効な手段として復活し、明治後期から昭和戦前にかけて、ナショナリズムの高揚と「国民精神・武道精神の涵養」の名目をもとに、武道は、学校体育において大きな位置を占めるようになった。

戦後は、連合国軍総司令部（GHQ）の影響で、学校武道は一時的に禁止された。そのような中、何とか学校教育における武道の復活を目指して、各武道を民主的スポーツとし、その中で最も早く学校教育への復活を果たしたのが柔道であった。そして、徳育重視の伝統を受け継ぐ教材、「格技」として体育の一領域として位置づけられた。その後、平成元年の学習指導要領の改訂において、「格技」から「武道」に名称が変更され、我が国固有の伝統文化を学ぶ教科となったのである（入江ら，2003）。

武士・武術の衰退から、学校体育における「武道」としての復活まで、簡単に示した。本来であれば、武術をそのままアイデンティティとして継承し、国際社会に対応してい

きたかったのだろうが、武士が消滅してしまうと、武術を残す理由が無くなってしまった。そこで、嘉納治五郎の柔道を、永木（2008）が「柔術という日本文化を延命させるために、それを消滅させようとする外圧（欧化主義等）に抵抗し、さらにはそのような潮流を乗り越えようとして「理論武装」あるいは戦略的な「適応」を図ったものであった」と指摘しているように、人殺しの術ではなく、教育として学校に登用擦ることで、「日本文化としての価値」づけ（永木，2008，pp. 135）をしたのである。

そして、特に戦後においては、身体鍛錬としての教育は不要かつ不可能となったため、それを強調せず、「修養」、「修行」というキャッチコピーを武器に、道徳的側面を押し出し、武道の特性として教育に入れ込み、それを日本の独自性としていったのである。

しかし、国際化が進むにつれ、勝利至上主義を重視する武道のスポーツ化が顕著になってきたため、そこで、かつて日本のアイデンティティとして採用された「武道」を取り上げ、今一度、武道に日本再形成を託し、その象徴となっているのが「礼法」なのである。

## 4 「礼」、「礼法」のまとめ

前章までで示してきたことから、「礼」、「礼法」について整理する。

まず、「礼」は、中国において、陰陽五行から生まれた、生活リズムや農耕生産の氣息など、自然と人間とを調和させるための「天の法則に従うための概念」であった。それは、人間社会の発展により、異なる民族が一つの国に共存するための、「国家秩序を維持するために人々が守る概念」となった。

そして、「礼」の概念は、天や人間を対象とするものにとどまらず、中国の古代武術にも反映されていった。古代武術では、伝統的な道德観、天人観、陰陽観の3つの基本観念が、武術の発展に大きな影響を及ぼしたとされている。したがって、文化形成や武術の技術理論など、全ての関係において陰陽による「調和づくり」を目指していたため、中国における「礼」は、「陰陽で調和をつくるための概念」と考えられる。

中国を起源とする「礼」の概念は、日本にそのまま伝わると、まず、皇室祭祀に用いられ、次いで、貴族の教養としての有職故実とされるとともに、朝廷礼式に用いられたとされている。その後、武家中心の社会となり、その特権意識を主張するために、今からさかのぼること約200年前、武家礼法が確立された。

その時代は、武家故実と言われる時代であったが、一般武家やその子女をも対象とした、日々の「しつけ」としての礼法を樹立していった礼法の代表格が、小笠原流である。小笠原流礼法は、弓術や馬術と結びついた、鎌倉時代から江戸時代までの武家社会の公式礼法であった。小笠原流礼法では、礼における行動の教養のあり方を説いた『修身論』と、体をいかに使うべきかを説いた『体用論』に礼法の重要事項がまとめられている。

そして、小笠原流礼法は、「実用・省略・美」を重視している。「実用・省略・美」という、無理・無駄のない実用的な動き方や身体の使い方を示すものこそが武家礼法であり、それは武士としての嗜みであると考えられている。武士にとって、いつ、どこで、どのような事態が起こっても、いつ戦闘が始まっても、それには臨機応変な対応が必要であった。強靱な身体や戦闘技術、何事にも動じず屈しない精神をつくりあげるために、武士は、「礼法」の稽古に力を注いだのである。

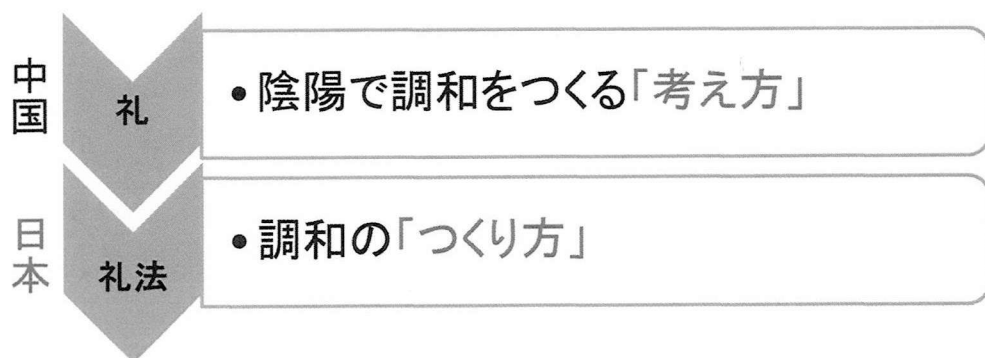
このように、中国においては、あくまでも「概念」として捉えられていたが、小笠原流礼法御宗家が、『人間の行為の全体にわたって、正しく礼というものによらなくてはならない。あらゆる物事の正しいということが礼である』と孔子は教えているが、日本

人はこれを実践的に受け止め、理論としてよりも、行動として発展させていった（小笠原，2015，p. 62）」と記しているように、概念を行動化した。

このように、「礼」の概念が日本に入ってきてから、日本では「礼」の概念を生かした行動として実践してきた。日本では、外来の優れたものを日本の伝統といえるように変容（中村ら，1998）させ、日本は「礼」の概念を受け入れ、自国でより実用的なものとなるようにアレンジし、様々な行動を定めるもととしたのである。その行動は、武士のふるまいに特徴づけられるように、「動き方」、「使い方」という、「礼法」に則ったものであった。「礼法」は、言うまでもなく、「礼」の概念をもとにしており、「動きという調和をつくるための行動の仕方」つまり、「調和の『つくり方』」であると考えられる。

したがって、「礼」の概念は、中国独自のものであり、日本では、それをもとに行動の仕方として「礼法」に発展させたと考えられ、「礼法」が、日本独自の伝統文化であると考えられる。（図1）。

図1 「礼」,「礼法」



武士の行動の仕方を示したものが武家礼法であったが、武士の消滅とともに、武術の存在意義がなくなったことから、武術は、国のために尽くす国民を育てる国民教育としての武道に切り替わり、現在に至る。また、それと同時に、「礼法」は、「武家礼法」から「武道の礼法」へと変化し、その役割は、「武士の嗜み」から「躰教育」へと変化したのである。このことから、武道に強調される修養主義は、武道を日本の伝統文化として位置づけるためのものであり、また、教育的価値を押し出すことによって、武道が日本になくてはならないものとして認識させていったのである。したがって、武道を残すための手段として用いられた修養主義は、伝統文化と言えないのではないかと考える。

また、武道や礼法を介した修養を通じて、心身の強化が期待されているが、本来は、



心身が強化されるのは、鍛錬による「効果」ではないだろうか。つまり、「心は後からついてくる」ということである。しかし、武術が武道に変化してから、「心を強くするために技を鍛錬する」ようになってしまっている。したがって、心のあり方は、「礼」や「礼法」にみられる伝統的な考え方や行動の仕方を理解し、行動として繰り返すことによって、「効果」として現れることを再認識する必要があるのではないかと考える。

そして、武士のみならず庶民にも通用する汎用的なものとなった「礼法」は、人間関係の調和、社会の調和、国の調和を保つための決まりを示している。あらゆる場面において活躍する「礼法」が保持する実用性を、改めて見直す必要があるのではないだろうか。

本章において、「礼」は中国独自の陰陽で調和をつくる概念であり、日本独自の武道の伝統文化が調和のつくり方を意味する「礼法」であること、修養主義は伝統文化ではないことが明らかになった。よって、次章では、伝統文化としての「礼法」の構成内容を検証したい。

## Ⅲ 「礼法」の構成内容の特定に関する検討

Ⅱの第4節でまとめたように、「礼」は、中国独自の「陰陽で調和をつくる『考え方』」，「礼法」は、「礼」の概念を生かした日本独自の「調和の『つくり方』」とした。「礼法」が、武道の伝統文化であることが明らかになったことから、武道授業で指導すべき態度の内容としての「礼法」の構成内容を特定した。

そこで、Ⅲでは、「礼法」の内容を明らかにするために、日本独自の「礼法」の因子構造を科学的・客観的に検討したことを述べる。

### 1 予備調査の実施

「礼法」の内容を特定するために、本研究では、武家礼法を確立し、「礼法」の代表格である小笠原流礼法に着目した。

「礼法」の仮説的構成概念を検討するために、6月から10月にかけて、弓馬術礼法小笠原教場三十一世小笠原流宗家、小笠原清忠先生ご指導のもと、小笠原流礼法門人の方々が稽古されている教場にて、予備調査として参与観察を行った。教場は、全国各地に広がっており、今回は、そのひとつである京都梨の木神社にて行われている稽古に伺った。

稽古日時は、毎月第4土曜の13時から16時である。

稽古内容は、まず、礼法の基本的な6つの動きである「立つ、座る、歩く、お辞儀をする、物を持つ、回る」を30分～1時間程度行った後、お焼香の仕方や着物の着脱の仕方と畳み方、熨斗や水引の作り方など、日常生活と結びつきのある動作や物の作り方・扱い方を稽古するというものであった。後者の稽古内容は、月ごとに異なるものであった。季節の行事等がある場合は、それに合わせた稽古内容で、時と場に応じて稽古内容も変更されていた。以上のような稽古に参加し、稽古を通じて観察したこと及び体感したことを記録した。

また、よりの射た仮説的構成概念を設定するために、御宗家より小笠原流礼法や武道の礼法・歴史等を教わり、門人の方々に対して、①武道を行ううえで、最も大切にしている考え方や行動の仕方、②学校体育で指導すべき礼法について聞き取り調査及び記述式質問紙調査を行った。武道の礼法に対する門人の率直な考えを得るため、

### Ⅲ 「礼法」の構成内容の特定に関する検討

婉曲的な聞き方を避け、①、②のような質問項目を設定した。なお、「礼法」の構成内容の特定に関する調査・分析等については、尺度開発を専門とする大学教員の指導をもとに行った。

参与観察を行った稽古日時・稽古内容は表1に、記述式質問紙調査の協力者等は表2に示す通りである。また、使用した記述式質問紙は資料1（54頁）に示す通りである。

表1 参与観察実施の詳細

期 日	時間	場所	稽古内容
平成28年6月25日（土）	13時～16時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②お焼香の仕方他 ※御宗家より礼法について教わる
平成28年7月23日（土）	13時～17時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②着物の着脱の仕方、畳紙の扱い方他 ※門人に聞き取り調査・記述式質問紙調査を行う
平成28年8月27日（土）	13時～18時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②熨斗の折り方、水引の作り方他 ※門人に聞き取り調査・記述式質問紙調査を行う
平成28年9月19日（月）	9時～12時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②午後の萩まつりの段取り、稽古
平成28年10月29日（土）	13時～20時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②翌日の七五三の段取り、稽古

表2 記述式質問紙調査の協力者

期日	日時	場所	協力者
平成28年7月23日（土）	13時～16時	梨の木神社	小笠原流礼法門人の20～60代男女
平成28年8月27日（土）	13時～16時	梨の木神社	小笠原流礼法門人の30～60代男女

## 2 仮説的構成概念の検討

聞き取り調査及び記述式質問紙調査を参考にし、著者が礼法を構成する概念を検討した。教科体育の態度の内容として指導するなら、という視点で、門人の回答の共通性に着目しながら検討を行った結果、1つ目は、「時・場所にあわせた相手を敬う心」、「自分の立場を意識する」などの回答から、いつでも誰に対しても同じ行動をとるのではなく、時や相手、場所に応じた行動を重視していると考え、「臨機応変性」とした。

2つ目は、「気をゆるめないこと、通常の呼吸をくずさないこと」、「自らを戒めること」、「人が見ていなくても、気を抜かず、正しい動作を心がける」などの回答から、常に自分の身心と向き合い、身心の調整を図ることを重視していると考え、「セルフコントロール」とした。

3つ目は、「息合いに従った動き」、「自分の身体を自然に使う」、「正しい姿勢が出来るか」などの回答から、常に身体の機能や身体の動かし方による無駄のなさなどを意識することを重視していると考え、「実用性・機能性」とした。

4つ目は、「自然（回り）と一体になる」、「全体の調和、試合の結果からみるとライバル関係ですが、その結果を導いてくれる仲間と考えています」などの回答から、自己中心的にならず、周囲への影響を意識すること、周囲へ合わせることを意識することを重視していると考え、「同調の意識」とした。

したがって、仮説的構成概念は、「臨機応変性」、「セルフコントロール」、「実用性・機能性」、「同調の意識」の4つとなった。

### 3 質問紙の作成

本研究において作成する尺度は、学校体育授業レベルで使用することから、検討した仮説的構成概念に基づき、高橋（2003）の「授業場面の観察カテゴリー」を用いた。

高橋（2003）は、体育授業の中ではさまざまな場面が生じ、とくに意味のある場面をあらかじめ決定しておき、それらが時系列でどのように出現したかを観察・記録する方法を「授業場面の期間記録法」と呼び、授業場面を「マネジメント」、「学習指導」、「認知学習」、「運動学習」の4つの場面に区分して記録する方法を紹介している。また、高橋（2003）は、授業全体の印象を評価するのではあまりにも雑把になるため、授業を区分する意義があると述べている。

そこで、「礼法」においても、より明確な評価を行うために、高橋（2003）の「授業場面の観察カテゴリー」を用いることとした。

学習場面を「マネジメント」、「学習指導」、「認知学習」、「運動学習」の4つの場面に区分し、区分した各学習場面と仮説的構成概念を照らし合わせながら尺度項目を作成し、著者が質問紙の原案を考案した。各学習場面の内容は、以下の表3に示した。

表3 学習場面の内容

学習場面	内 容
マネジメント	クラス全体が移動、待機、班分け、用具の準備、休憩、などの学習成果に直接つながらない活動に充てられている場面。
学習指導	教師がクラス全体の子どもに対して説明、演示、指示を与える場面。子どもの側からみれば、先生の話の聞いたり、観察したりする場面。しかし、教師の発問によって子どもの思考活動が中心になる場合はA1に記録する。
認知学習	子どもがグループで話し合ったり、学習カードに記入したりする場面。
運動学習	子どもが準備運動、練習、ゲームをおこなう場面。

#### 4 トライアンギュレーションの実施

考案した原案をもとに、トライアンギュレーションによる検討を行い、4つの仮説的構成概念と、それらを測定するための具体的な行動からなる質問紙を作成した。質問項目数は、33項目である。

なお、トライアンギュレーションの協力者の選定は、①武道の礼法に見識があること、②武道（柔道・剣道）に造詣が深いこと、③体育科教育（武道領域）を熟知していること、④尺度作成に精通していること、⑤国語表現・表記を熟知していることを条件とした。協力者の内訳は、小笠原流礼法門人（1名）、武道（柔道）を専門とする研究者（2名）、武道（剣道）を専門とする体育教員（1名）、国語教員（1名）である。上記の手順を経て作成した質問項目数（表4）及び質問紙（表5）は、以下の通りである。

表4 質問項目数

仮説的構成概念	学習場面				小 計
	マネジメント	学習指導	認知学習	運動学習	
臨機応変性	2項目	2項目	2項目	2項目	8項目
セルフコントロール	1項目	2項目	2項目	5項目	10項目
実用性・機能性	2項目	1項目	2項目	2項目	7項目
同調の意識	3項目	2項目	2項目	1項目	8項目
小 計	8項目	7項目	8項目	10項目	33項目

表 5 4つの仮説的構成概念とそれらを測定するための具体的な行動からなる質問

仮説的構成概念	学習場面			
	マネジメント	学習指導	認知学習	運動学習
<b>臨機応変性</b> (時・場・相手に応じて行動すること)	1. 準備・片付けをする時は、状況をよく見て、手薄なところや困っている仲間を手伝おうとしている	9. 説明・指示の時には、大切な事を聞き逃さないように、覚えたりメモしたりしようとしている	16. 仲間が落ち込んでいる時には、励ましたりフォローしたりしようとしている	24. 安全を考え、人とぶつからないように、いつも周囲に気を配るようにしている
	2. 整列をする時は、上座・下座を意識しようとしている	10. 説明・演示・指示が分かりやすいように、周囲に気を配るようにしている	17. 生徒同士の活動では自分の役割を見つけようとしている	25. 相手と向かい合った時は、いつも相手の気配を読もうとしている
<b>セルフコントロール</b> (状況に感情が左右されないこと)	3. 先生が前に立つと、静かにしようとしている	11. 説明・演示・指示の時には、私語をしないように集中している	18. 生徒同士の活動では、盛り上がってくると、冷静になるようにしている	26. 激しい攻防では、冷静になるようにしている
		12. 説明・演示・指示の時には、姿勢を正しくして聞こうとしている	19. 生徒同士の活動では、仲間への影響を考えて発言しようとしている	27. 勝った時は、ガッツポーズをしたり、はしゃいだりすると、落ち着かないようにしている
				28. 攻防前後に気分が高まったり、緊張したりしても、落ち着くようにしている
				29. 負けた時は、騒いだり落ち込んだりすると、落ち着かないようにしている
				30. 気持ちがひるんだ時は、奮い立たせようとしている
<b>実用性・機能性</b> (物の機能を損なわないように、物を大切に扱うこと・体の機能に逆らわないように、身体を動かすこと)	4. 道着や袴を丁寧にたたむようにしている	13. 演示の時には、見やすい場所に移動しようとしている	20. 学習カードや資料を整理しようとしている	31. 肩に力を入れず、自然体で立つようにしている
	5. 動きやすいように、道着や袴を正しく着用しようとしている		21. 生徒同士の活動では、話し合いがスムーズに進むような座り方をしようとしている	32. おじぎをする時は、しっかりと形式や正しい動作を守ろうとしている
<b>同調の意識</b> (人と動作を合わせること)	6. 授業開始・終了時のあいさつは、先生の礼に動作を合わせるようにしている	14. 先生の指示・発問に対して、返事をしたり反応したりしようとしている	22. グループでの話し合いや学習カードに記入する時は、他のグループや仲間のペースに合わせようとしている	33. おじぎをする時は、相手と呼吸を合わせるようにしている
	7. 整列する時は、まっすぐ並べるように周囲を見て、気を配るようにしている	15. 先生の指示・発問がある時には、いつも目を見るようにしている	23. 仲間の発言に対して、相づちを打とうとしている	
	8. 整列する時に、立ったり座ったりする時は、周囲の人に合わせるようにしている			

## 5 調査の手続き

### 5.1 調査方法

前項で示した仮説的構成概念とそれらを測定するための具体的な行動からなる33項目から、武道授業において礼法の定着度を評価する尺度を構成するために、以下の手続きにより、質問紙調査を実施した。使用した調査用紙（武道の「礼法」に関する調査）は、資料2として示している（55頁）。

本調査は、「礼法」の内容を特定することを目的としている。そこで、より高水準の調査結果を得るため、「礼法」を習得しているであろうと推察できる小笠原流門人、柔道高段者、剣道高段者を調査対象とした。

調査は、平成28年9月～10月に実施し、285名中、239名の有効回答を得ることができた。有効回答者の全体の平均年齢は52.1歳、「礼法」または武道継続年数は39.0年、平均段位は5.9段であった。調査協力者の内訳は、表6に示している。

表6 調査協力者

	有効回答数／全回答数	平均年齢	継続年数	平均段位
小笠原流礼法門人	28／28	52.8	39.0	
柔道高段者	138／152	52.4	39.1	5.5
剣道高段者	73／104	51.2	38.8	6.2
合計	239／285	52.1	39.0	5.9

調査方法は、小笠原流礼法門人については、稽古が行われている教場にて集団面接法により回答を得た。また、一部の門人に関しては、門人の代表者と著者が連絡を取り合い、郵送にて調査用紙を配布し、代表者が協力者に個別に調査用紙を配布し、協力者は個別に回答した。個別に回答された調査用紙は、代表者がとりまとめ、著者に返送された。

柔道高段者の回答については、兵庫県柔道連盟の協力を得て、柔道指導者講習会にて集団面接法により得られたものと、公的機関、大学教員、高校教員の代表者を通じて郵送（一部手渡し）にて調査用紙を配布し、集団面接法または個別にて回答を得られたものがある。後者の調査の実施・回収・返送は、各団体の代表者により行われた。

剣道高段者の回答については、財団法人姫路剣道連盟の協力を得て、稽古会にて集団面接法で回答を得たものと、町道場にて集団面接法で回答を得たもの、公的機関の



### Ⅲ 「礼法」の構成内容の特定に関する検討

代表者への手渡しによって調査用紙を配布し、集団面接法にて回答を得たものがある。後者の調査の実施・回収・返送は、各団体の代表者により行われた。

## 5.2 調査内容

調査内容は、①フェイスシート（性別・年齢・武道歴・段位）、②学校体育の武道授業において行われるべき、礼法にしたがった行動に関する尺度 33 項目によって構成されている。回答については、4 段階リッカート尺度によるものとした。尺度項目の配列については、ランダムに配置し、バイアスがかからないようにした。また、尺度項目は、学校体育向けに作成したもので、対象者が中学生であるが、回答者は成人であるため、調査用紙に「質問に対して、普段、自分自身が行っているかどうかを基準（難しい場合は、『もし、するなら…』でも構いません）に答えてください。」「質問項目に対して、最もあてはまると思う番号（1 つだけ）に○をつけてください。」と示した。

### 5.3 統計処理

得点の統計処理に関しては、SPSS Statistics ver.19 を使用し、以下の手順で行った。項目内容に最もあてはまると思う回答を4点、あてはまらない回答を1点として、4段階で換算した。各項目の標準偏差を求め、全項目の回答に偏向傾向がないことを確認したうえで、3～6の範囲で因子数を指定して探索的因子分析（主因子法・Promax 回転）を繰り返した。因子負荷量.40以上を基準に解釈可能性を検討することによって尺度における因子の抽出を行った。尺度の信頼性に関しては、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出し、内的一貫性を検証した。

## 6 結果

### 6.1 因子構造の抽出と因子の命名

まず、調査協力者である小笠原流礼法門人、柔道高段者、剣道高段者 239 名のデータの標準偏差に極端な偏向傾向がないことを確認した上で、得られたデータに対し、探索的因子分析（主因子法 Promax 回転）を試み、因子を抽出したところ、3 因子が最も妥当であると判断した。その際、因子負荷量が .40 未満の 1 項目を削除した。その後、因子数 3 として、再度、探索的因子分析を行った。その結果、全ての項目において因子負荷量 0.40 以上を示した。

先の因子に従属した単純構造を示した（表 7）。

表7 「礼法」の因子パターン行列

因子名	番号	設 問	因子負荷量	M	S D	Cronbachの $\alpha$ 係数
制 御 の 意 識	31	おじぎする時は、相手のタイミングや呼吸に合わせようとしている。	0.79	3.67	0.54	0.85
	16	おじぎをする時は、形式や正しい動作をしっかりと守ろうとしている。	0.71	3.88	0.34	
	32	みんなと一緒に立ったり座ったりする時は、周囲の人の動作のタイミングや呼吸に合わせるようにしている。	0.69	3.60	0.56	
	33	肩に力を入れず、自然体ですっと立つようにしている。	0.68	3.59	0.59	
	21	先生が説明・演示・指示の時には、常に姿勢を正しくするように気をつけている。	0.62	3.66	0.56	
	18	動きやすいように、いつも稽古着や防具を正しく着用するようにしている。	0.59	3.89	0.33	
	17	整列をする時は、常に上座・下座を意識するようにしている。	0.55	3.81	0.46	
	19	整列する時は、まっすぐ並べるように、いつも周囲の立つ位置に気を配るようにしている。	0.55	3.83	0.42	
	29	負けた時は、悔しくても騒いだり、落ち込んだりしないようにしている。	0.53	3.31	0.74	
臨 機 応 変 な ふ る ま い	11	学習が効率よく進むように、学習カードや資料をまとめたり整理したりするようにしている。	0.82	2.58	0.87	0.84
	12	話し合いや学習カードに記入する時は、他のグループや仲間のペースに合わせようとしている。	0.75	2.71	0.85	
	5	先生が説明・演示をする時には、大切なことや要点を聞き逃さないように、メモしたり、写真や動画を撮ったりしている。	0.61	2.68	0.91	
	25	仲間と活動する時には、効率よく学習が進むように、立つ位置や座る場所を工夫するようにしている。	0.57	3.38	0.72	
	24	仲間同士の活動では、仲間の影響を考えて発言したり行動したりするように気をつけている。	0.56	3.46	0.62	
	10	仲間同士の活動では、活動や話し合いが盛り上がりすぎたり、夢中になりすぎたりしないように、冷静さを失わないようにしている。	0.53	3.18	0.75	
	23	仲間同士の活動では、状況や雰囲気に応じた役割を見つけようとしている。	0.47	3.36	0.65	
	26	仲間が話すときには、相づちを打とうとしている。	0.44	3.13	0.76	
先 を 読 む 動 き	7	先生が演示する時には、見聞きしやすい場所に移動したり、姿勢を工夫したりしている。	0.76	3.78	0.46	0.78
	8	先生の指示・発問に対して、自然に反応したり返事したりしている。	0.70	3.53	0.63	
	6	先生が説明・演示・指示の時には、私語したり、よそ見をしたりしないようにしている。	0.69	3.85	0.38	
	1	準備・片づけをする時は、状況をよく見て、手薄なところや困っている仲間を手伝うようにしている。	0.45	3.59	0.56	
	9	仲間の元気がない時には、励ましたりフォローしたりしている。	0.43	3.37	0.66	

第 1 因子については、31「おじぎをする時は、相手のタイミングや呼吸に合わせるようにしている」や 16「おじぎをする時は、形式や正しい動作をしっかりと守ろうとしている」、32「みんなと一緒に立ったり座ったりする時は、周囲の人の動作のタイミングや呼吸に合わせるようにしている」など、動作時の意識に関する 9 項目で構成されている。これらは、対面した相手や場に対する自身の行動など、行動の際には、常に自分自身をコントロールするという「セルフコントロール」が必要であり、その意識に関するものであると解釈したため、「意識の制御」と命名した。

第 2 因子については、11「学習が効率よく進むように、学習カードや資料をまとめたり整理したりするようにしている」や 12「話し合いや学習カードに記入する時は、他のグループや仲間のペースに合わせようとしている」、5「先生が説明・演示をする時には、大切なことや要点を聞き逃さないように、メモしたり、写真や動画を撮ったりしている」など、動作を行う上での判断に関する 8 項目で構成されている。誰に対しても、どのような場に対しても、同じ行動をとるのではなく、相手やその場の雰囲気を読んで、その場その場に適切な行動がとれるように、臨機応変に行動を判断し、選択するという共通性があると解釈したため、「臨機応変なふるまい」と命名した。

第 3 因子については、7「先生が演示する時には、見聞きしやすい場所に移動したり、姿勢を工夫したりしている」や 8「先生の指示・発問に対して、自然に反応したり返事したりしている」、6「先生が説明・演示・指示の時には、私語したり、よそ見をしたりしないようにしている」など、意識や判断を踏まえた行動に関する 5 項目で構成されている。これらは、出来事に対する手立てを読み、どのような行動をとるのかということに関連するものであると解釈したため、「先を読む動き」と命名した。

## 6.2 内的一貫性の検証

各因子の内的一貫性を検証するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、「意識の制御」因子、「臨機応変なふるまい」因子、「先を読む動き」因子の 3 因子全体において.72, 「意識の制御」因子において.85, 「臨機応変なふるまい」因子において.84, 「先を読む動き」因子において.78 の値を得た.

3 因子いずれも.70 以上の値を得ているため、内的一貫性は確保されているものと考えられる.

## 7 武道授業における「礼」、「礼法」の考察

「礼」や「礼法」は、武道の伝統文化として捉えられている。しかし、それらの詳細が具体的に示されていることは少ない。よって、「礼」や「礼法」について論じてきたことを踏まえて、武道授業で指導すべき「礼」、「礼法」について考えたい。

Ⅱで述べたように、「礼」は、中国発祥の「陰陽で調和をつくる概念」である。そして、「礼」を生かして日本でつくられたのが伝統文化としての「調和のつくり方」を意味する「礼法」である。前章では、伝統的な行動の仕方としての「礼法」が、「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」の3つの要素で構成されていることが明らかになった。また、そのことから、「礼法」が伝統文化を学ぶ教材として学習可能であること、かつ、評価可能であることが明らかになった。「礼法」の学習内容としては、『礼法』の因子パターン行列」中の「設問」(35頁)が具体例である。

よって、「礼法」が中国独自の「陰陽で調和をつくる概念」であり、「礼法」が伝統文化としての『意識の制御』、『臨機応変なふるまい』、『先を読む動き』をもとにした調和の『つくり方』であると整理できた。しかし、武道や修養主義、「礼法」について考える際、戦闘のない現代において、「心の教育」と切り離すことは難しいだろう。なぜなら、「武道＝修養主義」、「修養主義＝伝統文化」という観念が定着してしまっているからである。

そのような中、本研究では、「礼法」を象徴とする修養主義が武道の伝統文化であるのか、また、そうであるならば、伝統文化と「礼法」のつながりがなければならないという視点から、その日本独自性を明らかにしてきた。しかし、武術が生き残るためには、武術は姿を変えざるを得なくなったため、修養主義を誇張した武道となったのである。本来なら、伝統文化として「行動の仕方」が受け継がなければならないはずが、武術から武道へと変化する際に付加された道徳的側面のみが武道の伝統文化の核として伝えられている。そして、これからも、道徳的側面が武道の重要視する内容として、また、それを象徴するものとして「礼法」が伝え続けられるのであろう。

しかし、今後も教科体育において、伝統文化を学ぶ教材として武道の「礼法」が採用されるのであれば、著者は、武道授業において、「武士の気持ちを体験してみよう」というように、「気持ち」を学ぶのではなく、「礼法」に基づいた「日本らしい行動の仕方」を自国の伝統文化として学ぶべきであると考え。そのような授業が展開されることで、初めて、自国の伝統文化を学んでいると言える同時に、体育で武道を学ぶ意義



があると主張できるのではないだろうか。

それを実現するためには、現在行われている道徳的側面を強調した指導内容を改善する必要がある。したがって、中国独自の陰陽で調和をつくる「礼」の概念を武道全般に関わるコア概念として広義に捉える。そして、それを発展させてつくられたのが日本独自の「調和の『つくり方』」を意味する「礼法」であることを認識する。そして、「礼法」を構成する「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」を重視した武道授業のあり方を早急に検討すべきである。

## IV 「礼にはじまり礼におわる」の解釈

### 1 「柔の理」とは

「礼法」が伝統文化として『意識の制御』、『臨機応変なふるまい』、『先を読む動き』をもとにした調和の『つくり方』であることが明らかになった。Ⅱの第1章第3節で示した武術の技法理論について考察した竹田ら（2002）は、「礼」は技にも反映されているという。竹田ら（2002）の知見から、著者は、「動きや技が成立した状態も調和である」と考えた。「礼法」が、「調和の『つくり方』」を示すことから、「動きや技の成立の仕方」をも示すことになるのではないだろうか。動きや技を成立（調和）させるためには、「礼法」にしたがわなければならない。「礼法」にしたがうことで、動きや技が成立するならば、武道の動きや技は「礼法」にしたがったものであると考えられる。このような推察から、武道の動きと「礼法」の関連をみることにした。

そこで、中国に起源をもちながら、我が国の柔術において醸成された心法を含んだ戦い方に関する包括的概念を「柔」と捉え、それによって規定される戦術的な思考様式として「柔の理」を定義付け、その「柔の理」の詳細を尺度開発によって明らかにしている有山ら（2016）『柔の原理定着尺度』の開発を通した柔道の学習内容の提示の知見を参考に、武道の動きと「礼法」の関連をみることにした。

「柔の理」の具体的内容としては、「力の衝突のない滑らかな動き様」を表す「柔」をコア価値としてもち、「充実した気力同士の衝突を避けることを旨として、臨機応変自在に変化することをベクトルとする伝統的な戦術思考様式」であるとしている。

有山ら（2016）は、現行の学習指導要領においては、武道と我が国の固有文化の関連について「伝統的な行動の仕方」を守るとともに「伝統的な考え方」を理解することを求めているにもかかわらず、肝心の武道に見られる「伝統」という概念の実体については具体的な明示がみられないのが現状であり、また、我が国の「伝統」の具体的表象として「相手を尊重する所作を守る」ことや「克己の心」を理解する必要性が説かれているが、それらと我が国の伝統との繋がりを示す明証についても示されていないという事実に着目している。

そして、我が国の伝統的な徒手の格闘技においては、「柔」道・「柔」術などのように、術を表現する冠として「柔」という概念を用いることが一般的であり、「柔の理」と呼

ばれる戦術的な思考様式を有することはその技能体系の最大の特徴となっている。それにもかかわらず、これまでの柔道の指導場面において、「柔の理」は日本人的感性をくすぐる動きを生み出す思考パターンとして概念レベルでの理解にとどまりがちであり、実体としての「柔よく剛を制す」動きは専ら運動の実践者や指導者の感覚的で情緒的な把握に委ねられてきた。

それによって、「柔」という概念や「柔の理」という思考様式が、自国の伝統的な考え方や行動の仕方と深い関わりをもつという認識は違和感なく共有されていても、実際にそれを体現した「柔よく剛を制す」動きや戦術を、明確な形や文脈をもった体育の学習内容として実際の授業で提示することは困難であり、その努力も希薄であったと指摘している。

そのような背景から、有山ら（2016）は、これまで感覚的で情緒的な把握にとどまってきた「柔よく剛を制す」動きや戦術を客観的・実証的に測定し得る尺度を開発することにより、測定評価可能な自国の文化を学ぶ学習内容として「柔の理」を柔道授業に位置付けることへの可能性を検討し、「柔の理」の個人における定着状況を客観的・実証的に把握することを研究の目的としている。

有山ら（2016）が示す調査方法に基づいて調査・分析が施された結果、「氣息を外す動き」因子、「陰陽の使い分け」因子の2因子で構成されていることが明らかになった。

「氣息を外す動き」因子は、常に相手に対して力で強圧的に対抗したり圧倒したりするのではなく、「かわす」「そらす」など、相手との気力やパワーの衝突を避けながら従順な動きを重視して攻防するという特徴的な動きやテクニックに関わるものであり、

「陰陽の使い分け」因子は、「相手が陰ならば陽（陽ならば陰）、動ならば静（静ならば動）」というように、場の気配を読みながら、常に臨機応変に相手の意図の裏や逆を選択するような状況判断に関するものであるとしている（有山ら，2016，pp. 421-432）。

## 2 「柔の理」と「礼法」の相関関係

前章で詳細を示した有山（2016）らの「柔の原理定着尺度」を用いて、「柔の理」と「礼法」の関連を検証した。検証方法は、SPSS Statistics ver.19 を使用し、Pearson の相関係数を算出することにより行った。検証の対象については、有山ら（2016）の「柔の原理定着尺度を構成するための調査」において、調査対象の一般人が 2.8 前後の得点を示しており、2.8 以上の得点を示すと「柔」の傾向があると判断した。したがって、本稿Ⅲに示した「武道における『礼』の概念に関する調査」においての「柔の理」の得点が 2.8 以上の協力者を精選し、「柔の理」と「礼法」との相関関係を算出した。なお、精選した協力者は 72 名である。

相関係数の算出の結果、「柔の理」と「礼法」において.42 を示し、相関関係がみられた（表 8）。

表 8 武道の動きと「礼法」の関連を検証するための相関係数

		礼法	柔の理
礼法	Pearson の相関係数	1	.419**
	有意確率（両側）		.000
柔の理	Pearson の相関係数	.419**	1
	有意確率（両側）	.000	

\*\*．相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

また、「柔の理」と「礼法」の各因子ごとの相関関係については、「意識の制御」と「氣息を外す動き」において.24,「臨機応変なふるまい」と「氣息を外す動き」において.27,「先を読む動き」と「氣息を外す動き」において.39,「意識の制御」と「陰陽の使い分け」において.25 を示した。「臨機応変なふるまい」と「先を読む動き」の 2 因子については、「陰陽の使い分け」との相関関係は示されなかった。（表 9）。

表 9 武道の動きと「礼法」の関連を検証するための相関関係の詳細

		氣息を外す 動き	陰陽の使い 分け
意識の制御	Pearson の 相関係数	.236*	.250*
	有意確率 (両側)	.045	.034
臨機応変な ふるまい	Pearson の 相関係数	.269*	.138
	有意確率 (両側)	.021	.247
先を読む 動き	Pearson の 相関係数	.386**	-.010
	有意確率 (両側)	.001	.934
**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。			
*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。			

### 3 武道の動きと「礼法」の関連

前節の結果から、武道の動きと「礼法」の関連について考察する。ただし、「武道の動きと礼法」という広義なものとして考えるため、「柔の理」と「礼法」の各因子間の詳細な考察は省略する。

今回の分析では、分析対象者を精選したが、「柔の理」と「礼法」には、弱い相関関係しかみられなかった。それに関しては、少々慎重に考察する必要がある。なぜなら、本調査において、武道の動きと「礼法」との関連を検討するために用いた、有山ら(2016)の「柔の理」について、押さえておかなければならないことがあるからである。

有山ら(2016)の「柔の理」の調査は、①柔道選手、②柔術修行者、③レスリング選手、④一般人を調査対象としている。そして、①～④の種目間の「柔の理」の定着状況の比較では、「②>①, ③, ④」, 「④>①」という結果を報告している。これについて有山ら(2016)は、「古流武術が競技化されないまま現代にまで受け継がれている柔術については、予想通り、『柔の理』がその修行者に確かに継承されている様子が看取でき」る。しかし、柔道の「柔の理」の定着度が「一般人よりも低くレスリング選手と同レベルに過ぎなかった」という結果から、「少なくとも競技柔道においては『柔よく剛を制す』動きが形骸化している恐れがある」と述べており、それは、オリンピックと結び付いたグローバルな競技スポーツとして存在せざるを得なくなっていることと密接なかかわりがあると推察している。そして、「それらは端的には競技ルールの変容となつてあらわれ、例えば体重制の導入により異なる体格の選手と戦うことのなくなった競技柔道は、「柔の理」を発揮する機会を失いつつあるのではないかと考えられる」と指摘している(有山ら, 2016, pp. 430)。

以上のことから、柔道選手には、「柔の理」が重視されていない傾向があることがわかる。したがって、本調査における協力者の柔道高段者すべてが柔道選手ではないが、協力者が柔術修行者であれば、さらに有意な相関関係が示されたと推察する。

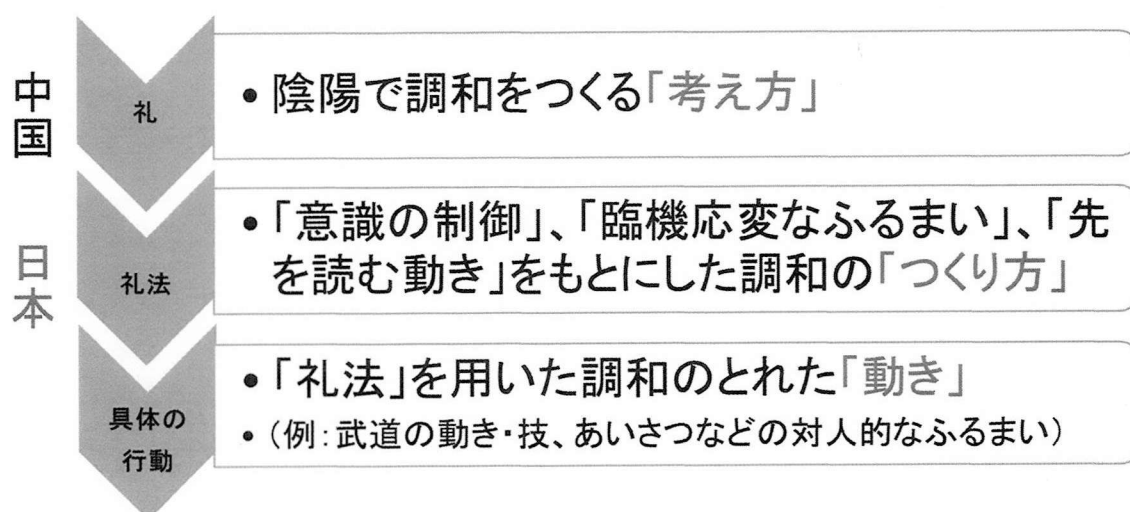
しかし、武道の動きを示す「柔の理」と「礼法」の全体に、.42の相関係数が示されたことから、武道の動きと「礼法」は、関連のあるものであると言えるであろう。「氣息を外す動き」や「陰陽の使い分け」は、調和のとれた「動き」を示す。そして、「礼法」は、「調和の『つくり方』」を示す。したがって、「礼法」は、「動き」をつくるための方法であると考ええる。つまり、「礼法」の「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」の3つを守ることで、相手と衝突しない「氣息を外す動き」が生まれるの

ではないだろうか。「陰陽の使い分け」についても、同様のことが言えるであろう。

したがって、「礼法」は、調和のとれた動きや技のつくり方、つまり、動きや技における「調和の『つくり方』」を意味し、動きや技をつかさどるものであると考えられる。また、作法の形は、一つのめど（小笠原，2015，p. 70）を示したものであり、「礼法」は様々な動きや技をつくるための模範的な方法で、作法と同様に、行動の仕方の「めど」を示す「行動の原則」とも言えるのではないだろうか。

また、「礼法」が動きや技における「調和の『つくり方』」であることから、武道の技やあいさつなどの対人的なふるまいは、「礼法」に則った「具体の行動」であると考えられる。「礼」という調和を実現させるための方法が「礼法」で、「礼法」に則った行動が「具体の行動」であるのではないかと考えられる。したがって、「礼法」は『意識の制御』、『臨機応変なふるまい』、『先を読む動き』をもとにした調和の『つくり方』、「具体の行動」は「調和のとれた『動き』」であると言えるであろう（図2）。

図2 「礼」、「礼法」、「具体の行動」



そして、武道の象徴とされている「礼にはじまり礼におわる」という言葉は、「あいさつにはじまりあいさつにおわる」のではない。「あいさつ」は前述した「具体の行動」としての一つの動作であり、「礼」は、武道という種目全体を生成し、つかさどる非常に広義な「考え方」であり、「礼法」は、その考え方に基づいて成立した武道全体にかかわる動きや技における「調和の『つくり方』」であると考えられる。

よって、本来の「礼にはじまり礼におわる」とは、端的に、『礼』は武道全体をつか

さどるものである」と解釈できるのではないだろうか。それは、武道を行う上で、常に「礼」という調和づくりの概念を意識し、「礼法」に則った調和のとれた動きや技を実践するという意味を示すと考えられる。このような意味合いから、「礼にはじまり礼におわる」は、武道に特徴づけられるのであろう。



## V まとめ

武道は日本の伝統文化を学ぶ教材であるとされ、武道憲章前文に「武道は人間形成を行う役割を果たしている」と示されているように、武道の修養主義を以てその存在意義を主張し、武道を行うことが日本人の教育そのものであるとされている。そして、その修養主義こそが武道の伝統文化であるとされており、修養主義的な伝統文化は「礼法」というものに象徴されている。

また、学校体育においても伝統文化を指導することが定められてから、武道領域がその役割を担っており、その修養主義的な伝統文化を学習する教材として、「礼法」があげられている。

そして、武道における修養主義が強調されているが、修養主義としての歴史は約100年と浅いものである。また、修養主義を象徴する教材となっている「礼法」についても、武道における「礼法」と自国の伝統文化とのつながりが不明瞭であり、またその内容にも独自性がみられず、「礼法」が伝統文化を学ぶ学習内容として成立可能であるのかも不明瞭である。

以上のような課題から、本研究においては、曖昧なままである「礼法」を明らかにし、武道の伝統文化として伝えるべき「礼法」を示すことが本研究の意義であるとし、①武道の礼法が確立した歴史的経緯、②日本独自の考え方が含まれる武道固有の「礼法」の本来の意味、③伝統的な行動の仕方としての「礼法」の構成内容を明らかにすることを通して、教科体育の武道授業において学ぶ、伝統文化と結びついた日本固有の「礼法」の捉え方を明示することを目的とした。

まず、「礼」は、中国において、陰陽五行（以下、「陰陽」とする）から生まれた、生活リズムや農耕生産の規則など、自然と人間とを調和させるための「天の法則に従うための概念」であった。それは、人間社会の発展により、異なる民族が一つの国に共存するための、「国家秩序を維持するために人々が守る概念」となった。そして、陰陽に基づいた「礼」の概念は、天や人間を対象とするものにとどまらず、文化形成や武術の技術理論など、全ての関係において「調和」づくりを目指していたため、中国における「礼」は、「陰陽で調和をつくる概念」であると考えられる。

「礼」が、『論語』とともに日本にもたらされると、その概念を応用し、概念を行動

化して「皇室祭祀」に生かされた。そして、「礼」の概念を生かしてつくられた「礼法」は、朝廷礼式に用いられた。その後、武家中心の社会となると、その特権意識を主張するために、武家礼法が確立された。武家礼法の代表格は小笠原流であり、小笠原流礼法は、弓術や馬術と結びついた、鎌倉時代から江戸時代までの武家社会の公式礼法であった。『修身論』と『体用論』を説いた小笠原流では、「実用・省略・美」を重視しており、「実用・省略・美」という、無理・無駄のない実用的な動き方や身体の使い方を示すものが武家礼法であり、それは武士としての嗜みであると考えられている。

「礼」の概念が日本に入ってから、日本では「礼」の概念を生かした行動として実践し、その行動は、武士のふるまいに特徴づけられるように、「動き方」、「使い方」という、「礼法」に則ったものであった。「礼法」は、言うまでもなく、「礼」の概念をもとにしており、「陰陽で調和をつくるための行動の仕方」、つまり、「調和の『作り方』」であると考えられる。したがって、「礼」は中国独自のもので、「礼法」が日本独自の伝統文化であると考えられる。

しかし、武士の消滅とともに、武術の存在意義がなくなったことから、武術は国のために尽くす国民を育てる国民教育として、また、国際社会に対応していくための日本のアイデンティティとして、修養主義を強調した武道に切り替えられた。また、それと同時に、「礼法」は、武士の嗜みから躰教育へと変化したのである。つまり、武士の嗜みとして「行動の仕方」を示す「礼法」は、武道の伝統文化であると言えるが、武術（道）を残すための手段として用いられた修養主義は、伝統文化と言えないのではないかと考えられる。

「礼法」が、武道の伝統文化であることが明らかになったことから、次に、「礼法」の内容を特定した。本研究において、一定の調査・分析方法に則り、科学的かつ客観的に明らかにされた「礼法」は、「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」の3因子に特定された。したがって、「礼法」が伝統文化を学ぶ教材として学習可能であること、かつ、評価可能であることが証明された。

また、「礼」は技にも反映されているという竹田ら（2002）の知見から、著者は、「動きや技が成立した状態も調和である」と考えた。「礼法」にしたがうことで、動きや技が成立するならば、武道の動きや技は「礼法」にしたがったものであると考えられる。このような推察から、武道の動きと「礼法」の関連をみることにした。

そこで、中国を源流とした、我が国の柔術における戦術的な思考様式を「柔の理」と

し、それは、「氣息を外す動き」因子と「陰陽の使い分け」因子で構成されているとしている有山ら（2016）の報告から、「柔の理」と「礼法」ともに「調和づくり」が根底にあるという共通性がうかがえる。よって、有山ら（2016）の「柔の原理定着尺度」を用い、「柔の理」と「礼法」の関連を検証した。

検証の結果、武道の動きを示す「柔の理」と「礼法」の全体に、42の相関係数が示されたことから、武道の動きと「礼法」は、関連のあるものであると言えるであろう。「氣息を外す動き」や「陰陽の使い分け」は、調和のとれた「動き」を示す。そして、「礼法」は、「調和の『つくり方』」を示す。したがって、「礼法」は、「動き」をつくるための方法であり、「礼法」の「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」の3つを守することで、調和のとれた「動き」が生まれるのではないだろうか。

このようなことから、「礼法」は、調和のとれた動きや技のつくり方、つまり、動きや技における「調和の『つくり方』」を意味し、動きや技をつかさどるものであると考えられる。また、「礼法」が動きや技における「調和の『つくり方』」であることから、武道の技やあいさつなどの対人的なふるまいは、「礼法」に則った「具体の行動」であると考えられる。

そして、武道の象徴とも言える「礼に始まり礼に終わる」という言葉は、「あいさつに始まりあいさつに終わる」のではない。「礼」や「礼法」の意味合いから、「礼にはじまり礼におわる」とは、『礼』は、武道全体をつかさどるものである」と解釈できるのではないだろうか。武道を行う上で、常に「礼」の概念を意識し、「礼法」に則った行動をとるという意味を示すと考えられる。

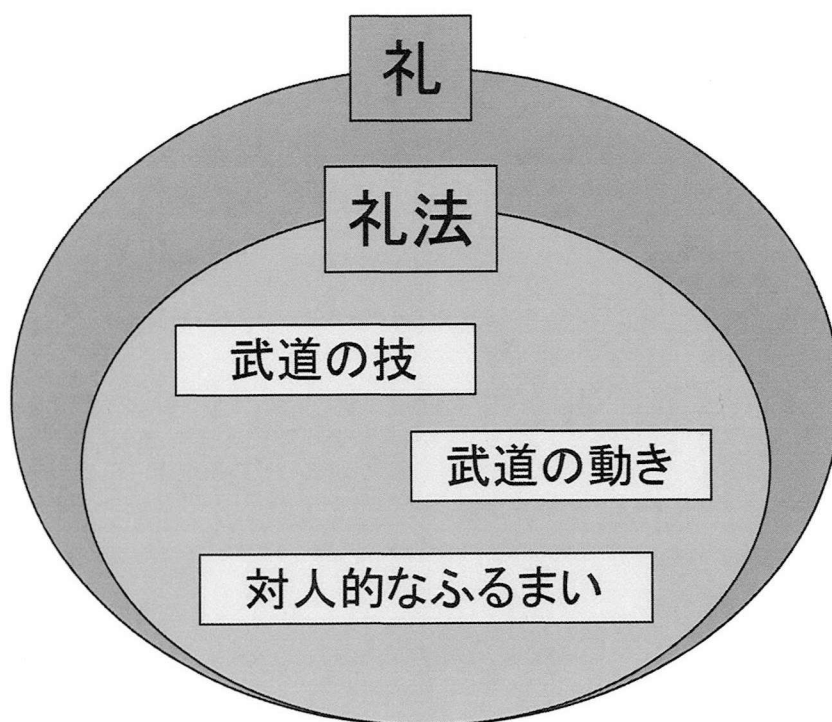
本研究において、明らかになったことは以下の通りである。

- ① 武道の伝統文化は「礼法」であり、修養主義ではないこと
- ② 日本独自の考え方が含まれる武道固有の「礼法」は、『意識の制御』、『臨機応変なふるまい』、『先を読む動き』をもとにした調和の『つくり方』であること
- ③ 「礼法」は、武道の動きや技をつかさどるものであること

武道の伝統文化が「礼法」であることは間違いないことが証明された。したがって、学習指導要領に示されている「武道＝修養」、「修養＝礼法」と捉えられる表現を改めなければならないと考える。

そこで、まず、中国独自の陰陽で調和をつくる「礼」の概念を、武道全般に関わるコア概念として広義に捉え、それを発展させてつくられたのが、日本独自の「礼法」とであると捉える（図3）。そして、「礼法」を道徳ではなく、「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」に基づいた武道全般の動きや技、「日本らしい動き方」などの「調和の『つくり方』」であると捉え直すべきである。それを踏まえた上で、態度のみならず、武道授業全体を通じて「礼法」を学習していくことが極めて重要である。

図3 「礼」の捉え方



(注 1) 武道憲章前文：昭和 62 (1987) 年に，日本武道協会が定めた武道憲章の前文．

武道憲章は，武道の新たな発展を期し定められ，全六条の基本的な指針を掲げている．

(注 2) 鄒衍（すうえん）：中国，戦国時代の斉の人．儒家の九州を超える大九州世界の存在と，五行（五徳）の消長による王朝の交替を説いた（前 305～前 240）．

(注 3) 有若（ゆうじゃく）：孔子の門人．魯の人．その言貌が孔子に似ていたので，孔子の没後に門人が思慕したのは有名．有子と総称．

引用・参考文献

- ・ 日本武道協議会：武道憲章，武道の理念  
<http://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyou/kenshou> （閲覧日：平成 28 年 12 月 25 日）
- ・ 湯浅 晃（2011）『武道伝書を読む』（株）ベースボール・マガジン社，p. 43
- ・ 田中守・藤堂良明・東憲一・村田直樹（2005）『武道 過去・現在・未来』（株）ベースボール・マガジン社，p.249，p. 227-228，p. 254，p. 15
- ・ 教育基本法，教育の目標第二条，五
- ・ 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説保健体育編」株式会社東山書房，pp. 105，p. 114
- ・ スポーツ庁政策課学校体育室（2016）  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/1368010.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1368010.htm)  
（閲覧日：平成 28 年 12 月 19 日）
- ・ 野村英幸・幸田隆・直原幹（2001）「文部省指定『武道指導推進校』の実践内容に関する研究」武道学研究 34-(1):11-22，pp. 21
- ・ 菅野 純（2011）『武道 子どもの心をはぐくむ』（株）ベースボール・マガジン社，p. 20-23
- ・ 有山篤利（2012）「武道必修化と柔道授業の安全をどう考えるか」体育科教育 60(7):74-75，p. 74-75
- ・ 中村民雄（2007）『今、なぜ武道か』（株）ベースボール・マガジン社，p. 352，pp.129
- ・ 末次美樹（2009）「武道における礼の教育的価値—礼の本質論についての研究—」駒澤大学総合教育研究部紀要 3:305-325，p. 306，pp.307
- ・ 有山篤利・山下秋二（2012）「教科体育における柔道の学習内容とその学びの構造に関する検討」体育科教育学研究 31(1):1-16，p.4
- ・ 下見隆雄（1973）『中国古典新書 礼記』明德出版社，p. 9
- ・ 岩波書店，広辞苑第五版，1998
- ・ 馬場武典・馬場欣司（2008）『剣道 剣道で磨く“心技体”』（株）ベースボール・マガジン社，pp. 14-16
- ・ 末次美樹・猪越悠介（2013）「武道における礼の概念—古代中国に成立した礼の考察—」駒澤大学総合教育研究部紀要 7:665-674，pp. 667

- ・狩野直禎（2015）『60分で名著快読 論語』凸版印刷，p. 4，p. 247-249
- ・リチャード・E・ニスベット著（2004）『木を見る西洋人 森を見る東洋人 思考の違いはいかにして生まれるのか』ダイヤモンド社，p.32，p. 27
- ・竹田隆一・陳民盛・黒須憲・斎藤浩二（2002）「中国における古代武術の成立に関する研究」山形大学紀要（教育科学）第13巻，第1号，pp. 21-25，pp. 26，27
- ・小笠原清忠（2010）『武道の礼法』(株)ベースボール・マガジン社，p. 33-34，p. 36，pp. 38，pp. 42-43，p. 50，pp. 48-50，p. 48，49
- ・17の憲法，第1条，第4条
- ・小笠原忠統（1991）『小笠原流礼法入門』日本文芸社，p. 23-29
- ・神崎宣武（2016）『「おじぎ」の日本文化』角川文庫，p. 108，pp. 107-122，pp. 12-13
- ・小笠原清基（2015）『小笠原流美しい大人のふるまい』日本実業出版社，p. 10，pp. 2-3
- ・入江康平・酒井利信・加藤純一・前林清和・長尾 進・大石純子・菊本智之・池田孝博・阿部哲史・永木耕介・村田直樹・数馬広二・田中 守・黒須 憲・松尾牧則・志々田文明・藤堂良明・崔 乗龍・菱田慶文・ボーダー・ユルーン（2003）『武道文化の探求』(株)不味堂出版，p. 60-68
- ・永木耕介（2008）『嘉納柔道思想の継承と変容』株式会社風間書房，pp. 44，pp. 135
- ・小笠原清忠（2015）『小笠原流の伝書を読む』(株)ベースボール・マガジン社，pp. 55-60，pp. 62，p. 66-67，p. 57，pp. 70
- ・中村敏雄・渡辺融・本田郁子・時津賢児・志々田文明・坂上康博・高津勝（1998）『スポーツ文化論シリーズ⑨ 日本文化の独自性』創文企画，p. 143
- ・高橋健夫（2003）『体育授業を観察評価するー授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』昭和出版，p. 36-39
- ・有山篤利・島本好平・中西純司（2016）「『柔の原理定着尺度』の開発を通じた柔道の学習内容の提示」体育学研究 61(2):421-433，一般社団法人日本体育学会，pp. 421-433

付録

- ・記述式質問紙
- ・武道の「礼法」に関する調査



武道授業における礼法（伝統的な考え方や行動の仕方）の  
評価尺度作成に関する事前調査

兵庫教育大学大学院 竹 内 友季子

（１）性別： 男 ・ 女

（２）年齢： 歳

（３）武道経験年数： 年（種目： ）

（４）小笠原流礼法修行年数： 年

以下の質問に答えてください。

質問１．武道を行ううえで、最も大切にしている考え方や行動の仕方は何ですか。

・ 相手と対面したとき

・ 相手がおらず、一人のとき

質問２．質問１の回答の中で、学校体育で指導するべきものを一つだけ答えてください。

質問３．質問２に対して、そう考える理由は何ですか。

## 資料 2

## 武道の「礼法」に関する調査

この調査は、中・高等学校の武道授業における「礼」の学習内容の改善を目的としています。深く考えず、直感で質問に答えてください。

ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

なお、回答によって得た情報については、研究目的以外に転用することはありません。また、研究の目的が達成できた後には責任を持ってデータを破棄いたします。

（兵庫教育大学大学院 竹内 友季子、兵庫教育大学大学院 有山 篤利）

※本研究は、2016年度笹川スポーツ財団奨励研究区分、「笹川スポーツ研究助成」の適用を受けて実施しています。

## ◎次の質問に答えてください。

1. 性 別：                      男      ・      女

2. 年 齢： \_\_\_\_\_ 歳

## 3. 武道歴・段位

※武道を複数種目している方は、1種目ずつ記入してください※端数は切り上げてください：10年3ヶ月→11年

※段外の方は「0」と記入してください

①種目 \_\_\_\_\_ ・ \_\_\_\_\_ 年 ・ \_\_\_\_\_ 段

②種目 \_\_\_\_\_ ・ \_\_\_\_\_ 年 ・ \_\_\_\_\_ 段

③種目 \_\_\_\_\_ ・ \_\_\_\_\_ 年 ・ \_\_\_\_\_ 段

※該当する方だけ記入してください

4. 小笠原流礼法修行歴： \_\_\_\_\_ 年

## 問題 1

## &lt;注意事項&gt;

- ・質問に対して、普段、自分自身が行っているかどうかを基準(難しい場合は、「もし、するなら・・・」と想像してください)に答えてください。
- ・質問文に、よく似た言葉や表現が出てきても、前の回答とは無関係に、感じた通りに回答してください。
- ・質問には、すべて答えてください。

## &lt;回答例&gt;

次のように、番号に○をつけてください。

全くしていない  
あまりしていない  
ときどきしている  
いつもしている

問題	質 問	回 答
1	次履きやすいように、玄関では、くつをそろえるようにしている。	④ 3 2 1

◎以下の質問項目に対して、最もあてはまると思う番号（１つだけ）に○をつけてください。

全くしていない  
あまりしていない  
ときどきしている  
いつもしている

問題	質 問	回 答
1	準備・片付けをする時は、状況をよく見て、手薄なところや困っている仲間を手伝うようにしている。	4 3 2 1
2	話をしているも、先生が前に立つと、気配を察してすぐに静かにするようにしている。	4 3 2 1
3	次に使いやすいように、稽古着を丁寧にたたんだり、防具を整理して片付けたりするようにしている。	4 3 2 1
4	稽古のはじめとおわりのあいさつは、先生のおじぎに動作を合わせるようにしている。	4 3 2 1
5	先生が説明・指示をする時には、大切な事や要点を聞き逃さないように、メモしたり、写真や動画を撮ったりしている。	4 3 2 1
6	先生が説明・演示・指示をする時には、私語をしたり、よそ見をしたりしないようにしている。	4 3 2 1
7	先生が演示をする時には、見聞きしやすい場所に移動したり、姿勢を工夫したりしている。	4 3 2 1
8	先生の指示・発問に対して、自然に反応したり返事したりしている。	4 3 2 1
9	仲間の元気がない時には、励ましたりフォローしたりしている。	4 3 2 1
10	仲間同士の活動では、活動や話し合いが盛り上がりすぎたり、夢中になりすぎたりしないように、冷静さを失わないようにしている。	4 3 2 1
11	学習が効率よく進むように、学習カードや資料をまとめたり整理したりするようにしている。	4 3 2 1
12	話し合いや学習カードに記入する時は、他のグループや仲間のペースに合わせようとしている。	4 3 2 1
13	安全を考え、人とぶつからないように、いつも周囲に気を配るようにしている。	4 3 2 1
14	激しい攻防では、闘志をむき出しにせず、冷静になるようにしている。	4 3 2 1
15	勝った時は、うれしくてもガッツポーズをしたり、はしゃいだりしないようにしている。	4 3 2 1
16	おじぎをする時は、形式や正しい動作をしっかりと守ろうとしている。	4 3 2 1
17	整列をする時は、常に上座・下座を意識するようにしている。	4 3 2 1

裏面につづく

18	動きやすいように、いつも稽古着や防具を正しく着用するようにしている。	4	3	2	1
19	整列する時は、まっすぐ並べるように、いつも周囲の立つ位置に気を配るようにしている。	4	3	2	1
20	説明・演示・指示の時には、仲間の妨げにならないように、座る位置や姿勢に気をつけている。	4	3	2	1
21	先生が説明・演示・指示の時には、常に姿勢を正しくするように気をつけている。	4	3	2	1
22	先生の指示・発問がある時には、いつも目を見るようにしている。	4	3	2	1
23	仲間同士の活動では、状況や雰囲気に応じた役割を見つけようとしている。	4	3	2	1
24	仲間同士の活動では、仲間への影響を考慮して発言したり行動したりするように気をつけている。	4	3	2	1
25	仲間と活動する時には、効率よく学習が進むように、立つ位置や座る場所を工夫するようにしている。	4	3	2	1
26	仲間が話す時には、相づちを打とうとしている。	4	3	2	1
27	相手と向かい合っている時は、いつも相手の気配を読もうとしている。	4	3	2	1
28	気分が高まったり、緊張したりしても、落ち着くように深呼吸したり、呼吸を整えたりしている。	4	3	2	1
29	負けた時は、悔しくても騒いだり、落ち込んだりしないようにしている。	4	3	2	1
30	気持ちがひるんだ時は、奮い立たせようとしている。	4	3	2	1
31	おじぎをする時は、相手のタイミングや呼吸に合わせようとしている。	4	3	2	1
32	みんなと一緒に立ったり座ったりする時は、周囲の人の動作のタイミングや呼吸に合わせるようにしている。	4	3	2	1
33	肩に力を入れず、自然体ですっと立つようにしている。	4	3	2	1

**問題 2****＜注意事項＞**

- ・相手と戦うときに、あなたが好きである、カッコいいと感じるやり方や考え方を、あなたの好みを基準に答えてください。
- ・示された2つの例は、両者ともに合理的な考え方です。この調査は、あなたの個人的な好みやイメージを問うもので、どちらが正しいかを問うものではありません。
- ・剣道や柔道などの対人的競技をしていない場合は、「もし、するなら…」と想像して答えてください。
- ・質問に対して、首尾一貫した態度をとる必要はありません。よく似た言葉や表現が出てきても、前の回答とは無関係に、感じた通りに回答してください。
- ・質問には、すべて答えてください。

**＜回答例＞**

次のように、番号に○をつけてください。

番号		回 答	
1	相手が闘志満々なら、 負けずに闘志を燃やす	4   ③   2   1	逆に冷静になる

◎以下の質問項目に対して、最もあてはまると思う番号（1つだけ）に○をつけてください。

番号		回 答	
1	相手が闘志満々のときには、 負けずに闘志を燃やす	4   3   2   1	逆に冷静になる
2	強い力に対しては、 すかしたりそらしたりする	4   3   2   1	より強い力を出そうとする
3	素早く動く相手には より素早く動く	4   3   2   1	どっしり構える
4	戦うときの基本の構え（姿勢）は、 力を抜いてすらっと立つ	4   3   2   1	力を入れてがっちり構える
5	相手の技に対応するときは、 相手の動きを自分に利用する	4   3   2   1	相手の動きを力強く制する
6	優勢に戦いを進めるには、 状況に応じた多彩な技を出す	4   3   2   1	絶対的な決め技にこだわりをもつ

7	あなたが守勢になっている 場合には、  相手の動きをかわす ような守りをする	4 3 2 1	相手の動きを跳ね返すような堅い 守りをする
8	自分の動きに引き込むには、 相手に合わせながら 自分の動きに転化する	4 3 2 1	相手の動きを跳ね返すような堅い 守りをする
9	相手が激しく動きまわる場合には、 相手よりもっと激しく動く	4 3 2 1	落ち着いてどっしり構える
10	自分が闘志満々のときには、 闘志を表に出す	4 3 2 1	平静をよそおう
11	試合が始まる瞬間には、 相手の出方や気配を 読んで攻撃する	4 3 2 1	相手に関係なく自分の決めた方法 で攻撃する
12	相手の技を防ぐには、 そらしたりかわしたりする	4 3 2 1	受け止めたり押し返したりする
13	勝負のクライマックスでは、 気迫を前面に押し出す	4 3 2 1	つとめて冷静になる
14	試合運びのキーポイントは、 相手の動きに瞬時に 反応して動く	4 3 2 1	相手にかかわらず自分の得意な 動きをする
15	戦術を考えるときには、 どんな相手にも自分の戦術 は変えない	4 3 2 1	相手によって戦術は変える
16	相手の激しい攻めに対しては、 勢いに負けないように反撃する	4 3 2 1	逆らわずに受け流しながら 反撃する
17	相手の堅い守りに対しては、 相手を誘い出す工夫をする	4 3 2 1	自分のやり方で力強く攻める
18	相手が試合中に戦い方を変えて きたなら、 自分の決めた戦法をつらぬく	4 3 2 1	状況に応じて戦法を変える
19	相手がにらみ付けてきたら、 にらみ返す	4 3 2 1	受け流す
20	守りから攻めに転じる場合は、 相手の動きや力を利用して 反撃する	4 3 2 1	自分の得意な動きで力強く 反撃する

おわり

ご協力ありがとうございました。